

クロニカ (3) – 叙情のクロニスタ、ルーベン・ブラガ

CRÔNICA(3) – Rubem Braga, o cronista do lirismo

エレナ・トイダ  
Helena H. TOIDA

O presente trabalho dará continuidade aos anteriores, nos quais fizemos uma abordagem etimológica do termo crônica e sua evolução literária e análise de João do Rio, um cronista do início do século XX, respectivamente.

A crônica começou a se posicionar no meio literário a partir dos meados do século XIX e atinge sua popularidade nos primeiros anos do século XX, sendo seu representante João do Rio, cronista de grande sensibilidade que retrata a vida mundana da então capital, Rio de Janeiro. Através de suas obras, revivemos a fase denominada *belle époque* carioca, em que a metrópole passava por vertiginosas transformações sociais e econômicas.

Neste trabalho, daremos destaque ao maior cronista do século XX, Rubem Braga, um literato que passa para a história da literatura brasileira, única e exclusivamente pela produção de crônicas, o que é um acontecimento peculiar. Seu grande valor como literato deve-se ao fato de ter consolidado a crônica como gênero literário genuinamente brasileiro.

Já foi dito nos trabalhos anteriores que a crônica tem como tema os acontecimentos do cotidiano, principalmente da vida urbana, sendo sua função primordial divertir os leitores através da técnica narrativa, que pode utilizar-se do humor, da ironia, do lirismo. É principalmente com esta última que Rubem Braga reveste suas obras, tecendo textos de mais alto nível de lirismo, sua marca registrada.

## はじめに

以前発表した拙稿(1)では、「クロニカ」というジャンルがブラジル独自のものであることを、その語源や文学史を通して考察した。20世紀に入り、多くの作家や評論家の支持のもと、文学界で市民権を得たこのジャンルは、研究が進むにつれ、筆者にその奥深さを思い知らせることとなった。芸術を人生に近づけ、ルポルタージュを文学に近づける、このクロニカなるものをどう位置づけたらいいのか。文芸評論家のアフラニオ・コウチニョ (Afrânio Coutinho) (2)は次のように定義する。

クロニカとは、その本質において、強い抒情をもつ一つの芸術、言葉の芸術である。非常に私的で、人生のスペクタル、出来事、生きとし生けるものを前にして起こる個人的な、そして本質的なリアクションなのである。

次に取り上げたのは、象徴主義から近代主義への過渡期のさなか、通俗にわきあがる20世紀初頭の、生き生きとした当時の首都リオ・デ・ジャネイロの街をクロニカのテーマとしたジョアン・ド・リオ (João do Rio) に焦点を当て、考察を試みた(3)。人々の日常に起こる些細な出来事のコメントーターとして、称賛すべきこのクロニスタ(4)は、クロニカがその地位を確立するのに大きく貢献したのである。

しかし、クロニカが20世紀においてブラジル独自のジャンルとして定位置を獲得するのは、その立役者にしてクロニカの最高峰、ルーベン・ブラガ (Rubem Braga) によるものである。1990年に77歳でその生涯を終えるまで、62年にも及ぶジャーナリストとしての人生の大半の出来事は、彼の1万5千作品以上のクロニカの中に残された。そして、それは現在でも親しまれ続けているのである。ここにクロニカの一文学ジャンルたる意味があるのだ。

以上をふまえて、本稿では、唯一クロニスタとしての業績のみで、ブラジル文学史にその名を連ねるブラガについて考察するものである。

## ルーベン・ブラガとは？

ブラガは1913年、エスピリト・サント州のカシヨエイロ・デ・イタペミリン市で生まれる。ミナス・ジェライス州のペロ・オリゾンテ大法科学部を修了するが、在学中からすでに同州の「午後の日報」(*Diário da Tarde*)にクロニカや記事を書き、編集の仕事に携わっていた。しかし、これが彼の一生を左右するジャーナリズムとの出会いではなかった。校内新聞への投稿などにより、彼は、高校在学中からジャーナリストとしての頭角をすでに現していたのだ。

1930年から40年代のブラジルは、大統領選で敗れたジェツリオ・ヴァルガスのクーデター、ブラジル統一運動の開始とそれに対する反乱、ヴァルガスの新国家体制の樹立など、政情不安な時期だった。1932年、サンパウロ州で勃発した反政府革命のルポルタージュ担当になったブラガは、スパイ容疑で逮捕されるなど、若くしてすでに様々なことを経験することになる。1933年末には、「サンパウロ日報」(*Diário de São Paulo*)のクロニスタ兼記者として勤務し、そこで著名な作家たちとも知り合い、多くの刺激を受ける。彼は反ヴァルガス政権の姿勢を貫き、それゆえ迫害をうけるが、その反骨精神も強固だった。これも彼のクロニカの基盤を形成する一つの過程に過ぎなかったといえる。以下、彼の作品を通してブラガのクロニカの特徴を考察していきたい。

## ブラガのクロニカ

1936年、ルーベン・ブラガの初めてのクロニカ集『男爵と小鳥』(*O Conde e o Passarinho*)が出版される。第2集の『隔絶の丘』(*O morro do isolamento*, 1944年)は、1964年に第1集と合わせて再出版される。

作品集のタイトルにもなった「男爵と小鳥」というクロニカは、公園で出会うある男爵と一羽の小鳥の物語なのだが、作者は男爵を権力ある富裕層、小鳥を権力に虐げられる弱者というメタファーに置き換えている。男爵は自分をめがけて飛んでくるその小鳥に、子供のように両手を差し出す。「しかしそれは子供の手でも、聖人の手でもない。実業家男爵の手なのである。」小鳥は彼の胸にある勲章を嘴で盗ってってしまうのだが、「わが

親愛なる小鳥君、君はどの胸にその勲章をつけるのかね」とクロニスタは尋ねる。さて、どの胸に権力は預けられるのだろうか。実際に当時のある実業家に向けられた痛烈な批判だったので、上司から警告を受けることになったが、それに屈するようなブラガではなかった。1935年の作品だが、皮肉たっぷりに描かれているあたりは、まさに彼に書かれたクロニカだからこそ可能だったといえる。

第2集『隔絶の丘』からは、リオで起こる一風景がテーマの「コーヒーブレイク」(“Cafezinho”)をとりあげる。ある記者が刑事に会いに行くが、「かれはちょっとコーヒーブレイクで…」と何時間も待たされ、結局会わずに帰るはめになった話である。つまり「コーヒーブレイク」とは、誰かと顔を合わせたくない場合、口実としてよく使われる手なのだ。我々は日々大勢の人と言葉を交わさなければならない。時々はいやになる。そんな時、最良の方法は「コーヒーブレイク」と言うことだ。誰が訪ねて来ても、「ちょっとコーヒーブレイクで…」と言おう。たとえ相手が死であったとしても、5分前にコーヒーを飲みに出かけたと言えるではないか。ブラガのテンポのいい語りと、ブラジル人なら一度は経験しているであろうシチュエーションに、失笑した読者も多いことだろう。このようにブラガは何気ない日常生活の一片を切り取り、その中にブラジル人の気質を語っていくのだ。

第二次世界大戦中の1944年、ブラジルはイタリアに遠征軍をおくのだが、ブラガは従軍記者として戦地に赴くことになった。そこで多数の戦争クロニカを書き、1945年その選集『ブラジル遠征軍とともにイタリアへ』(Com a FEB na Itália)を出版した。これは1964年、改めて『戦争のクロニカ』(Crônicas de guerra)として再出版された。第1話の「出発」(“A partida”)は、兵士たちが船に乗り込む様子を中心に描かれているクロニカだ。彼らの専らの話題は、「蛇は煙草を吸うのか、吸わないのか」に終始する奇妙なものだ。これは当時の遠征軍のスローガンである「蛇は煙草をふかす」(A cobra vai fumar)を用いているにすぎない。なぜ蛇なのか。どうやらブラジルが参戦するより、蛇が煙草をふかす方が簡単だと他国(特にイギリス)から揶揄されたことへの、ブラジルの返答だったようである。船内ではすでに乗船している兵士たちが、参戦するのか、しないのかを論争している。いよいよ船が動き出し、港をあとにする。それぞれがリオの

街に別れを告げる中、小さな漁船の上から一人の漁師がゆっくりと手を振る。起立し、まるで義務を果たすかのように。それはしかし、心からのメッセージであり、見るものを感動させたとある。このように常に人間を見つめ、必ずしも自分の意にそぐわないにせよ、ブラガは戦地で多数のクロニカを書き続けたのである。

1948年には特に名作とされる「一株のとうもろこし」(“Um pé de milho”)が収録されている、同名の作品集が出版される。初版のはしがきで、著者自身が各クロニカの初出について述べているのだが、著者の性格がそのままクロニカの特徴と重なるような結びが面白い。「正確にどこに発表されたかについてはもう詳しく述べない。それは意味のないディテールであり、そんなことで読者を疲れさせないためだ。」この作品は400語あまりの短いものであり、たった一株の他愛もないとうもろこしが、無学で哀れな平凡な男を裕福な農夫に一変させる過程が描かれているだけのことである。人はささやかな事で心が一変するというメッセージがこめられている作品だが、ブラガ独特の叙情的表現とこまやかな描写が冴える。改めて、些細な事でも物でも一瞬の幸せを与えてくれるのだと気付かされる。これを読むのにたいして時間はかからない。その何分かの間に読者を感動させ、うなずかせられれば、文学の本来の役割—教え、感動させ、楽しませ、そして最終的には人々の苦しみを浄化する—は果たされていると思われる(5)。

1951年、初めての選集『クロニカ 50 選』(50 *Crônicas escolhidas*)、それから28年後の1979年、『クロニカ 200 選』(200 *Crônicas escolhidas*)が発行される。後者は2000年にも再版されている。このように、長い間書き貯められたクロニカは、多くの場合、作者自身によってアンソロジーが編まれる。クロニカに文学作品本来の普遍性を与えるため、このような方法がとられるのであるが、著名な文芸批評家モイゼース(Moisés)(6)は、次のように考察している。

ルポルターージュと文学作品の、ある出来事の客観的な報告と空想に彩られた創作との間で揺れ動くクロニカは、新聞や雑誌のコラムや文芸欄に掲載される作品であるがゆえ、すぐに「老化」してしまう宿命を持つ。それに抵抗するがごとくアンソロジーが編まれるのだが、それでもクロニカは時の腐食には勝てな

ように思える。まるで、その役割は儂さの上にはか成り立たないように。

しかし、実際には再版されるなど、「時の腐食」に耐え続けていることも否めない事実である。「儂さ」の上にはかなりたたないものだとすれば、その厳しく危うい条件の下で、クロニカは時の腐食に十分耐え得る力をもっている。この本質にこそ読者は魅力を感じるのではないだろうか。

ブラガはクロニスタをジプシーと同じだと言ったことがある。それについて、ジョルジェ・デ・サー(Jorge de Sá) (7)が非常に面白い比較をしているので紹介したい。

クロニカはジプシーのテント小屋で、クロニスタは每晚そのテントを張り、夜明け前にはまたたんで去っていくジプシーのようなものだ。

アンソロジーが編まれると、クロニカは初めて「テント」から「家」に変わり、永遠の命(普遍性)を吹き込まれるものだというのであろう。

その他、1950年代から60年代にかけて数冊のクロニカ集(8)が出版されたが、その中から代表的な作品について以下考察する。

『コパカバーナよ、覚悟せよ!』(*Ai de ti, Copacabana!*)は1960年に初版、そして1961年、1964年と再版されている作品集だ。表題作は1958年の作品だが、かなり独特なネーミングだ。かの有名なコパカバーナ海岸が、開発により荒れ果てていくのに対する警告を22点にまとめて上げてある。

しかし、この作品集の中でも教材などによく取り上げられるのは、「もう一つの夜」(“A outra noite”)と「パン配達人」(“O padeiro”)である。前者は自然界と人間界の類似性を、後者は素朴なパン屋の仕事とブラガ自身の記者の仕事との類似性をテーマにして書かれた作品である。

「もう一つの夜」はわずか200字あまりの、1959年に書かれた短いクロニカである。著者と思しきリオ在住の「私」はサンパウロに出張し、その日のうちに帰ることにした。タクシーに乗り、偶然会った友人ともどもタクシーで自宅へ帰る途中、赤信号で止まったとき、運転手に突然尋ねられる。

「本当にあの上のほうには月夜があるんですかい？」

それまで「私」は友人に、雲の上の話をしてきたのだ。下界を覆う真っ

黒な雲の上には、「月光にくるまれた、真っ白な、夢のマットレスがあり、幻想的な風景がひろがっているのだ」と。その通りだと答えると、運転手は窓から頭を出して、雨雲に閉ざされた空を見上げた。目的地に着くと、彼はまるで「私」が素晴らしいプレゼントでもしたかのように、感謝の気持ちをこめてお礼を言った。明暗の世界、それは常に我々人間を取り巻いているものではないか。しかし、見方を変えれば、暗黒は光に変えられるのではないか。雨雲が月明かりを一時的に遮っているように、暗い夜は、いつかは明けるのだというメッセージがこめられている。たった数行の明暗の対比がそのような効果を引き出すのは、ブラガの手腕によるものだ。

「パン配達人」は1956年に書かれ、ブラジルの日常的な風景を題材に「私」＝ブラガ自身の心境を見事に描出した作品である。そしてそれは誰しもいつかは経験したであろう感慨を、思い起こすきっかけになるのだ。

ブラジルでは近くのパン屋に頼むと、焼きたてのパンを毎朝届けてくれる。「私」はいつものようにパンをとろうとドアを開けると、あるべきパンがそこにはなかった。そうだ、パン屋はストだったなあ。仕方がないので、昨日のパンで朝食をすませるうちに、昔会った一人の素朴なパン配達人のことを思い出した。パンを配達するとき、チャイムを鳴らし、まず大声で知らせる。“Não é ninguém, é o padeiro!” (「怪しいものではありませんよ。パン配達人ですよ。」日本語に訳すると、ポルトガル語のニュアンスが損なわれてしまうのが残念だ。)この場合、Não é ninguém とは直訳すると、「誰でもない」、つまり存在しないという意味になるのだ。そこにはいないということ、人間にとって存在を否定されることは残酷なことであろう。なぜそう言うようになったのかとパン配達人に尋ねると、彼は傷ついた様子もなく、誰かが言っているのを聞いて覚えたと言った。その時「私」はパン配達人と自分を重ね合わせていた。まだ若い頃、新聞社に夜勤めていたことがある。夜勤明けに帰路を急ぐ頃、自分が手にしたまだ温かい新聞は、パンと同じく各家庭に届けられるものだ。そこには無記名の記事の他に、自分の名前が明記されたクロニカが載っている。若いときはそれだけで自惚れてしまうことがありがちだ。しかし、パン屋の配達するホカホカのパンは機械から出てきたばかりの新聞と同じではないか。そう考えたとき、「私」は彼から謙虚であることの大切さを学んだのだ。「ただのパン屋ですよ！」と明るく大声で言えるパン配達人に。

この素朴な男は毎朝家庭にパンを届けることに余念が無い。ただ世の中に役立っていることへの充実感と喜びだけがそこにある。たとえ「誰でもない」と言われたとしても、確かに彼の存在はパンが証明してくれるからである。

1986年出版の作品集『夏と女たち』(*O verão e as mulheres*)に収録されている一編が「カシューの木」(“Cajueiro”)である。あたたかい眼差しが印象的なクロニカで、去り行く「もの」へのオマージュともいえる。この作品は筆者が子供時代を過ごした田舎の家に類似している。

カシューの木は私が生まれた時、すでに老木だったのである。それは私の子供時代の一番古い記憶の一つだ。美しく、大きく、裏山の高い所にそびえていた。(中略)まるで家族を守る聖なる存在だった。(中略)一番下の妹の手紙によると、カシューの木はある風の強い午後に倒れたようだ。それもまるで私たちの古い家の屋根を壊すのを恐れるかのように、少し逸れて倒れたと書いてあった。妹は気落ちして今は亡き母や父、兄弟のことを考えながら一日を過ごしたとあった。また彼女の幼い子供たちは、初めは驚いていたが、やがて倒木の残骸で遊び始めた。

つい最近、9月のことだ。花をいっぱいつけていたようだ。(1954年9月)(9)

筆者の子供時代の記憶のなかに、やはり同じようなカシューの大木がある。それが引き金となり、田舎の家で暮らした様々な思い出がよみがえる。若くして死んだ兄のことを思い出す。人はこうして遠い昔に葬り去った思い出を呼びおこし、喪失感から少しずつ解放されていくのだろう。また思い出されるという行為を通して、誰かの記憶に留まり続ける。そして悲しみとともに、今は亡き人々と過ごした幸せな時間がよみがえり、これからも生き続けるために自分の存在を確かめることができるのだ。

読者にこのような癒しの効果をもたらすのは、ブラガの人間を暖かく見つめる眼差しのせいなのだ。残念なことに、どれほど言葉をつくしても、このクロニスタのはかりしれぬ、洞察力に優れ、温かさや優しさに溢れた心情は語りつくせない。

日常の一瞬を永遠の一瞬に変えてしまう—そんな力を持っていることを誇示することさえしないこのクロニスタの偉大な功績は、「シンプルな言



葉ほど心に響く。単純なものほど美しい。」ことを徹底して追及したからにほかならない。

ジョゼー・リンス・ド・ヘゴ (José Lins do Rego) (10) は 1948 年、『一株のとうもろこし』出版に際してのコメントで、ブラガを「クロニカの詩人」(O poeta da crônica) と称している。その中でブラガはいったい何を要求しているのかと論じるのだが、ヘゴは明確な答えは一つで、それは単なる一株のとうもろこしにすぎないと断言するのである。ブラガ自身がとうもろこしなのだ。初めは何かさえもわからなかった小さな苗が、やがて一本のとうもろこしとなり実を結ぶ様は、まさにこの偉大なるクロニスタにほかならないというのである。なんとも明確な表現である。

また著名な文芸評論家のダヴィ・アヒグッチ (Davi Arrigucci Jr.) (11) によると、「日常の予期せぬ出来事をとらえようとするジャーナリズムに鍛えられたクロニスタの眼は、瞬間をとらえるためにスタンバイしている。クロニスタは、いうなれば、時の流れの抒情詩人だ。」だからこそ、そのスタイルはイメージや突然のひらめきに彩られているのだと断言している。

#### 情熱

これまで一度として「写真そのもの」に情熱を傾けたことはない。私が愛するのは、自らをも忘れる一瞬のうちに、被写体がもたらす感動と形状の美しさを記録する写真の可能性だ。そこに現れたものが呼びおこす幾何学だ。

写真のワン・ショット、それは私のスケッチブックの一冊。(12)

これは偉大な写真家、カルティエ＝ブレッソン (Henri Cartier-Bresson) の言であるが、ワン・ショットはクロニカであり、スケッチ・ブックはアンソロジーだ。日常の一瞬が、永遠の一瞬に変わるときである。

現実がくりひろげる世界は実に豊潤だ。私たちはそれをありのままに切り取り、しかもその本質を簡潔に見せなければならない。けれど、はたして本当に見せるべきものを切り取れているのだろうか。カメラを構えながら、私たちはつねに自分の行動を冷静に判断する必要がある。(13)

ブレッソンが危惧していることは、ブラガも同じであろう。多くの場合

ルポルタージュから発生するクロニカは、この面において写真と類似する点がある。

## おわりに

ジョアン・ド・リオがクロニカの基本理念を明確に定義し、その後の方向性を示し、現代クロニカの出発点となったのであれば、ルーベン・ブラガの最大の貢献は、クロニカをブラジル文学独自のれっきとした一ジャンルに位置づけたことにあるだろう。

だからこそ、私の戯曲も、クロニカも、未来の著書も、読者が理解するものに終始する。そして、今私が生きているこの瞬間の側面を、記憶に止めようとする想いだけがその中にあるのだ。

これはド・リオの言であるが、ブラガの姿勢となんら変わるところはない。

1975年、奇しくもブラガはサン＝テグジュペリの『人間の土地』を訳すことになる。ブラガの手がけた唯一の翻訳作品である。サン＝テグジュペリは、下界に灯る明かりの一つ一つの下には、とるにたらないささやかな生活があるという。それを熟知していたブラガにとって、この作品がクロニカ創作への「ビタミン剤」になったことは言うまでもない。事実、ブラガは訳し終えた後、「この本で僕は結構調子が良くなったよ。そこらの葉よりも良く効いた」と言っている。(14)

ぼくはアルゼンチンにおける自分の最初の夜間飛行の晩の景観を、いま目のあたりに見る心地がする。それは、星かげのように、平野のそこそこに、ともしびばかりが輝く暗夜だった。

あのともしびの一つ一つは、見わたすかぎり一面の闇の大海原の中にも、なお人間の心という奇跡が存在することを示していた。あの一軒では、読書したり、思索したり、打明け話をしたり（中略）しているかもしれなかった。それぞれの糧を求めて、それらのともしびは、山野のあいだに、ぼつりぼつりと光っていた。中には、詩人の、教師の、大工さんのともしびと思しい、いともつ

つましやかなものも認められた。しかしまた他方、これらの生きた星々のあいだにまじって、閉ざされた窓々、消えた星々、眠る人々がなんとおびただしく存在することだろう……。努めなければならないのは、自分を完成することだ。試みなければならないのは、山野のあいだにぼつりぼつりと光っているあのともしびたちと、心を通じあうことだ。(15)

ブラガはサン・テグジュペリ同様、その「ともしびたち」を認め、そして語ることに情熱を傾けたのだ。魂は呼応するのだと思うのは筆者だけではあるまい。世の中には運命的な出逢いが必ずあるもので、この二人の出逢いも実にそうなのだと思う。

ブラガが1964年から住んだマンションは、リオの有名な海岸の一角にある高層ビルのペントハウスだった。ここで錚々たる顔ぶれの作家や詩人、音楽家や俳優たちと交流したといわれている。そのうちの一人で、天才クロニスタと称されるフェルナンド・サビーノ(Fernando Sabino)(16)とは、共同で出版社(Editora do Autor)を創設したこともある。

また中でも話題に上るのが、彼の空中果樹園だ。ブラガは海と陸が「共存する」楽園を作ることが夢であったようだが、彼のペントハウスはまさにその実現である。グァバ、マンゴー、ざくろ、桑、スターフルーツから、ブラジル特産の樹木であるジャブチカーバやピタンガ、アラサーやカシューなどが繁る屋上の果樹園に潮風が流れ込む。その風に吹かれながら、小さな果樹園から海や街を眺め、創作のミュージズに身をまかせることがブラガの日課だったようだ。「空中の農主」と友人たちに呼ばれた由縁である。そこから見渡す世界は、やはりテグジュペリの情景に似通ったものがあったのだろう。

他愛のない出来事の意義を見出すことにかけては、まさにブラガは天才としかいいようがない。シンプルで的確な文章、そして叙情的で静かな暖かい視点と風刺—それらがすべて融合され、読者は彼のクロニカの中に、過ぎていく一瞬一瞬をいとおしむ語り手＝クロニスタを発見する。日常の取るに足らない小さな出来事が評価され、そこにこそ大切にすべきことが存在するというのを、読者は教えられるのだ。

ジョアン・ド・リオは街頭に「魂がある！」と断言し、それを愛していると言っていた。『街頭の魅惑的な魂たち』(A alma encantadora das

ruas) (17) は、大都市の隅に息づく刺青師、街頭を彩る壁画、阿片中毒者、流れのミュージシャン、カーニヴァルの人の群れ、高級娼婦たち、女乞食、恋愛沙汰の殺人、女囚など、ベル・エポックを謳歌する社会とは程遠い題材が、叙情と暖かさと風刺のきいた表現で語られている作品集である。

彼の作品も発表から1世紀たった今でも再版され続けている。それは、力強く語りかけてくる人間の根本的な魂の叫びを、しっかりととらえ描写したド・リオの才能が作品の根底に息づいているからだろう。

まさにジョアン・ド・リオが作ったクロニカの基盤の上に、その意思を引き継いで、ブラガはクロニカをれっきとしたブラジル文学独自の1ジャンルまでに完成させたのだ。

ブラガはすでに1990年に死去している。しかし、年代にかかわらずその作品群は多くの人々に愛読され続けている。ここにクロニカの普遍性と時の超越が確認されるのだ。これは単なる学術的な立場からの見解だが、読者にとってそれよりもはるかに大切なのは、我々の身近に留まるクロニカを人生への道標とし、日々の苦しみを浄化していくことだ。そうすることによってクロニカは本来の存在意義を見出していることになるのである。

20世紀に生まれそして駆け抜けた、ルーベン・ブラガの77年間の豪快な生き様と残された多くのクロニカについて語るには、どうにも的確な言葉が足りないようだ。反省の極みである。しかし多くを語らずとも、ブラガの作品に触れればそれは自ずと伝わってくるのだ。この拙い文章がそのきっかけになってくれればと願うのみである。

\*ポルトガル語文献およびクロニカの引用は、本稿のために独自に翻訳したものである。

## 注

- (1) トイダ、エレナ「クロニカ (1)-ブラジル文学における独自のジャンル」、『上智大学外国語学部紀要』第36号、2001年、pp.133-147
- (2) Afrânio Coutinho 現代の批評家たちに多大な影響を与えた文芸評論

家。文学作品の構成に重点を置く分析を主張した。

- (3) トイダ、エレナ「クロニカ(2)-20世紀初頭のクロニスタ、ジョアン・ド・リオ」、『上智大学外国語学部紀要』第38号、2003年、pp.131-149
- (4) クロニスタ クロニカを書くひとのことを指す。
- (5) (1) 参照。
- (6) Moisés, Massaud、500 ページ、文献参照。
- (7) Sá, Jorge de、17 ページ、文献参照。
- (8) *Três primitivos*, 1954; *A borboleta amarela*, 1955/1956/1963; *A cidade e a roça*, 1957; *O homem rouco*, 1963; *A traição das elegantes*, 1967.
- (9) Braga, Rubem、84 ~ 85 ページ、文献参照。
- (10) José Lins do Rego (1901-1957) 北東部を中心に展開した地方文学の作家。砂糖黍園をテーマにした作品が多い。
- (11) Davi Arrigucci Jr. (1943-) ブラガのクロニカの編者を担当。
- (12) カルティエ=ブレッソン、アンリ、『こころの眼』、堀内花子・訳、岩波書店、2007年、26 ページ。
- (13) 同、31 ページ。
- (14) Castello, José、145 ページ、文献参照。
- (15) サン・テグジュペリ、アントワヌ、『人間の土地』、訳・堀口大学、新潮文庫、1955年、5 ~ 6 ページ。
- (16) Fernando Sabino (1923-) 現代を代表するクロニスタ。繊細なユーモアが彼のクロニカの特徴である。
- (17) 1908年出版のジョアン・ド・リオの代表的なクロニカ集。

## 参考文献

Barreto, Paulo, *Crônicas Efêmeras*, São Paulo, Oficina do livro, 2001.

Bosi, Alfredo (org.), *A história concisa da literatura brasileira*, São Paulo, Cultrix, 1977.

Braga, Rubem, *Ai de ti, Copacabana*, Rio de Janeiro, Editora do Autor, 1960.

Braga, Rubem, *200 Crônicas Escolhidas*, São Paulo, Rio de Janeiro,

- Record, 1996.
- Braga, Rubem, *O conde e o passarinho*, Rio de Janeiro, Editora do Autor, 1961.
- Braga, Rubem, *Os melhores contos de Rubem Braga*, seleção de Davi Arrigucci Jr., São Paulo, Global, 1999.
- Braga, Rubem, *O verão e as mulheres*, RJ, Record, 1986.
- Braga, Rubem, *Um pé de milho*, RJ, Record, 1982.
- Castello, José, *Na cobertura de Rubem Braga*, Rio de Janeiro, José Olympio, 1996.
- Coutinho, Afrânio, *Notas de teoria literária*, Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1976.
- Moisés, Massaud, *História da literatura brasileira*, vol.V, São Paulo, Cultrix, 1983-1989.
- Moisés, Massaud, *Pequeno dicionário da literatura brasileira*, 6.ed., São Paulo, Cultrix, 2001.
- Moriconi, Ítalo (org.), *Os cem melhores contos brasileiros do século*, Rio de Janeiro, Ed.Objetiva, 2000.
- Sá, Jorge de, *A crônica*, São Paulo, Ática, 2001.
- Saint-Exupéry, Antoine de, *Terra dos homens*, trad.Rubem Braga, Rio de Janeiro, José Olympio, 1975.
- Setor de Filologia da FCRB, *A crônica*, Campinas:Ed.Unicamp, Rio de Janeiro:
- Fundação Casa de Rui Barbosa, 1992.
- Stegagno-Picchio, Luciana, *História da literatura brasileira*, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 2004.
- Stern, Irwin, *Dictionary of Brazilian literature*, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1988.